参考資料１

第３回検討委員会における意見の概要

１　第６次山形県教育振興計画（素案）の基本目標等について

（１）基本目標について

○　資料２の計画素案では、コラムなども散りばめているなど、おもしろいものができそうだ。特に、山形の宝である「縄文の女神」のコラムを取り入れたことはすばらしい。

○　５教振の目標がわかりやすかった。簡略化できるところは簡略化した方がいい。

（２）目指す人間像について

○　「いのち」をつなぐ人について、勤労観・職業観の育成の面で、私たちが日々綿々と繰り返される「営み（両親の働き・祖父母の背中を見て）」が関わってくるのではないか。「いのち」をつなぐストーリーの中に「食べること、住むこと、着ること」を含めた生活、それを支える労働・勤労という流れを加えることができないか。

○　「自尊感情」と「自己有用感」という２つの言葉がいろいろなところに出てきている。グローバル化の中で、変化に強くなっていく人材を育てていくためにも、話の筋書きとして、自己有用感（相手を思いやる気持ち）を前の方に出して、その後に、自尊感情を記載した方が、現在の変化に対応する人材という意味において、流れがスムーズではないか。

○　３つの目指す人間像のイメージ図を出され、大変わかりやすくなっている。「いのち」をつなぐ人では、発達に応じた大切な部分がしっかり記載されている。

２　第６次山形県教育振興計画（素案）の基本方針と主要施策について

（１）総括的事項

○　シンプルさを大切にして精査し、単純にわかりやすいものにしていく必要性がある。

○　学校で何を重点にしていけばよいか、もっと絞り込めたら、取り組みやすいものとなる。

○　素案は、バランスよく記載されている。

（２）基本方針Ⅰ「いのちを大切にし、生命をつなぐ教育を推進する」について

○　「いのち」を継承することに、家庭が非常に大事な部分を担っている。家庭の中で様々な学びがあり、子どもたちが将来こんな家庭を作りたいと思えるような「いのち」をつなぐ役割を持っている。

○　「いのち」の日は、学校と家庭で、子ども自身の存在を認めることができる日にしていきたい。

○　「④次代の親としての家庭観の醸成」について、もっとクローズアップした方がよい。幼児との触れ合いや縦のつながりなど、今、家庭では学べない、人を大事にする心や小さい子をいたわる心が育っていく。

○　いじめ防止を掲げ、学校はいじめがあることを前提とした指導をしていかなければならないが、いじめは人間関係の問題であり、子どもたちにそこを乗り越える力も付けていく必要がある。

（３）基本方針Ⅱ「郷土に誇りを持ち、地域とつながる心を育成する」について

○　ふるさと教育については、前から読んでいくと少し違和感があった。後ろに「地域とつながり続ける人」と大きな柱があるので、後ろに持っていってはどうか。

○　伝統を大切にするだけではなく、伝統を重視しながら新たな価値をつくる、創造力豊かな人を育成することについての記載が必要。

○　過去の文化を守るだけではなく、未来志向にして、地域づくりに結びつかせていく視点を盛り込んでいく必要がある。文化継承に自分たちも参加し、新しいものをつくっていくという活き活きとした部分を盛り込みたい。

○　生活の中にこそ、宝があり、文化財だけではなく、生きた生活の中に残っている宝に関しても、目を向けてほしい。生活の中では、世代がつながっており、先輩から、産業・生業として継承し、触れ合い、生き方を学んでいる。

○　ふるさと塾について、どのような効果があるのか、課題はないのか、盛んになればよいのか、新たな価値の創造、青少年にとっての価値など、振り返りが足りない。

○　教育の中に郷土の先人をもっと取り上げてほしい。教育の中で、人を取り上げる機会が少ない。人に学んで生きていくのが基本であり、子ども達が「あの人のようになりたい」と思うような立派な生き方を示していくことが大事である。

（４）基本方針Ⅲ「豊かな心と健やかな体を育成する」について

○　自立する力を付けるための一番最初のトレーニングの部分が欠けているのではないか。

○　家庭教育について、網羅されている。特に、家庭の在り方が多様化している中、学習の機会が届かない親に対する支援のような形で支えていくことは大事なことである。

○　家庭教育に取り組む気運の醸成については、県民を挙げて取組むべきこと。まずは、当事者である保護者の意識からつくっていかなければならない。例えば、ＰＴＡと学校が共催で家庭教育に関する事業を展開していくことはできないか。

○　地産地消を大事にするという基本的な部分をもう一度見直し、身近な家庭からの教育を基本とした「いのちの教育」の推進をしていきたい。

○　他人の痛みがわかる子どもに育てるためには、子どもの現状を見て、周りの大人が態度で示していくことが必要。

○　子どもに寄り添う教育について、親の理解を深めるための機会が必要。仕事だけでなく、子どもをしっかり見ながら働く意識の大切さを保護者に伝えていく必要がある。

○　幼稚園教諭も１０年置きに免許更新講習を行っており、さらに、資質向上のために研修する機会を設ける時間が必要になるが、多忙でなかなか難しい。園にもう一人多く配置するような施策だと研修に取り組むことができ、資質向上につながる。

○　幼保小の連携では、接続だけでなく、連続性ということを大切にして、夢や希望を持った子どもたちを育てていければと思う。

○　幼保小連携について、公開保育や公開授業など、幼稚園と小学校の教員が一緒に授業したり、保育を見たりすることができる機会を年に何回か位置づけるカリキュラムにしていくと、より充実したものになるのではないか。

○　保育所では、子どもの育ちと保護者の子育てを支え、家庭と連携していくことが一番の役割である。素案では保護者との連携の部分が弱い。今は乳児保育も当たり前で、１歳児の待機児童も非常に多いので、幼児教育ではなく、「乳」幼児教育でなければならない。

○　幼児教育という言葉がクローズアップされているが、なかなか保護者には伝わりにくい。知識や特別な技術の早期獲得のみを目指すような教育になってはいけないので、特にその部分を保護者に伝えていかなければならない。

○　中学校の教員は、体育授業や生活指導、運動部活動もあって負担が大きく、そのいずれについても高いレベルを求められる。

○　幼・小・中・高の連続性も大事で、それぞれで区切るのではなく、例えば、中・高で部活を一緒にやるのもいい。ことスポーツに関しては、学校所属という側面が強い。競技大会に参加するにも、学校として、又は引率の教員がいないと参加できないなどの現状もある。そういうことも踏まえ、部活動の運営方法等を改善できればいい。

○　ドリームキッズで実施されているプログラムの内容は多岐に渡っていて、必ずしも運動の仕方や競技の体験だけではない。食育や保護者向けのプログラムなど、ドリームキッズで取り組んでいる内容を、他の施策や様々な分野とも連携・連動していくとよい。

（５）基本方針Ⅳ「社会を生きぬく基盤となる確かな学力を育成する」について

○　社会を生きぬく確かな基盤となる学力については、授業づくりが大事だと思っているが、なかなか中学校の授業が変わらない。中学校の場合、生徒指導や部活動指導に重点が置かれ、ややもすると授業が軽視されることがある。

○　「さんさん」プランで、少人数になったことで、子どもの顔が良く見えるようになり、子どもにしっかり対応できるようになっている。授業の中で子ども達の意見を吸い上げやすくなったり、いいコミュニケーションがとれるようになったりして、授業づくりがよくなった。

○　「34 人～40 人の学年単学級の解消」が実現できればもっと救われる教員・子ども達がたくさん出てくるのではないか。

○　小さいときからコミュニケーションの能力が足りないことで苦労している子ども達がいて、それが学力に影響していることは現場でも感じていること。

○　確かな学力の育成（１）の①と②は、逆に記載する方がいいのではないか。いい学級のもとではいい授業ができ、それが学力向上につながる。一人ひとりを活かした楽しい授業をすると学力のアップにつながることを感じているので、それがまず先にくるといいのではないか。

○　協同学習についても、もう少し大きく取り上げてもいいのではないか。

○　高校でも授業を変えるのが一番難しい。高校も課題解決の授業に切り替えていかなければならない。

○　フィンランドの教育は、自分で課題を見つけて、自分で調べ、掘り下げることを大事にし、それを周りがサポートし、自分自身で実践する力を育てている。

○　幼・小・中・高を通した県としての目標設定をきちっと作り、教科ごと何をするかが見えると、中・高の連携についても、そこから先に何をやっていけばいいのかということがはっきりしてくるのではないか。

○　「自分で課題を見つけて調べ、それを表現していく」ことを小学校から行うことが必要で、そのような調べ学習をするには、図書館司書が必要となる。小学校のうちから資料を読み取って、まとめていくという言語力が付き、中学校・高校でも続くと、グローバル化に対応できる言語力が身に付くのではないか。また、調べ学習をするための先生方の研修も必要がある。

（６）基本方針Ⅴ「変化に対応し、社会で自立できる力を育成する」について

○　大学残留率の問題が述べられているが、県内の残留率について求めながら、実際は難関大学進学へ向けての対策を取り、県外に人が出て行くという矛盾についても考え、対策をとっていく必要がある。

○　高校の場合、理科の実験がＩＣＴに取って代わられている。実験をする時間がないので、見て終わりとしている現実もあり、果たしてそれでよいのか検証していく必要がある。

○　フリーターや早期離職者が問題になっているが、社会の変化に対して自然なことなのかもしれない。逆に、今の社会が多様な価値観に応えることができるような働く場を用意できていない側面もあるのではないか。変化に対応する人は、自分のスキルが上がると、欧米の場合は次のステップに向けて転職する。経済がグローバル化し、多様化していく中で、企業にずっととどまって欲しいという価値観について見直す必要があるのではないか。

○　変化に対応できるたくましい社員を見ていると、出したものを片付けるなど当たり前のことを当たり前に繰り返しできる力を持っている。そのような社員は、変化に対応する能力やコミュニケーション能力が高く、相手の状況を先に考える力がある。相手の気持ちを考える力があ

るかどうかということが大切になる。

○　指標として、内定率が今までも取り上げられていたが、勤労観の育成や社会で自立できる力を育成する指標が内定率にならないようにしたい。親や身近な人の働く姿を見て仕事に興味をもった子どもの比率などで十分である。

○　グローバル化とは、相手に敬意を払うこと。敬意を払うには、相手を思いやり、相手の国のことを知り、自分自身がさすが日本人と思われる人になることが大事で、それがグローバル化の出発点になる。その基盤となるものは教養で、どの分野でも興味を広く持ち、そしてスタンダードになるもの・価値のあるものを見出す力を養わせること。

○　ＩＣＴ教育の推進について、地域の得意な方たちにボランティアやセカンドビジネスの形でやっていただく形を作れれば先進的な取組みになるのではないか。

○　環境教育については、まさに山形県でできること。米沢では屋敷畑があり、フードマイレージゼロの生活がある。この生き方は、これからの持続可能な最先端の生き方であり、県内にはそういった暮らしがたくさんある。そういうことを子ども達が理解し表現していくことで、自分たちの県がすごいと自覚し、自尊心につながるのではないか。

（７）基本方針Ⅵ「特別なニーズに対応した教育を推進する」について

○　県が何をやるのかという部分が少ない。もっと県として支援できる部分、特に人の配置について前向きな記載が欲しい。

（８）基本方針Ⅷ「学校と家庭・地域が協働し支え合う仕組みを構築する」について

○　「学校と家庭・地域との連携・協働」について、県として力を入れていく部分が見えてこない。学校支援地域本部は、何が普及のネックとなっているかわかっているはず。具体的な取組みを例示して、状況が改善していくような方向性を県が作っていく必要がある。

（９）基本方針Ⅸ「活力あるコミュニティ形成に向け、地域の教育力を高める」について

○　博物館は、老朽化を考慮し、多額の経費が見込まれるが、施設設備の更新に向けて前進させてほしい。また、ハード面の強化に併せ、ソフト面を充実することも重要。建物を更新するのと並行して内容充実を図り、その魅力を県内外に発信するなど、積極的に活用してほしい。それにより、地域とつながる拠点となり、生涯学習の場としての役割も担う重要な施設であることをしっかり認識して取り組んでほしい。

○　公文書館は、１県に１館の設置という動きもあった中で、山形県は実現できなかった数少ない県の一つ。そのため、県史を編纂する際に、古文書が無いなど対応が困難なこともあった。古いことに限らず、現在をどうつないでいくかという問題でもある。ぜひ、その設置に向けて前向きに検討願いたい。

○　山形県が誇るべき方言や郷土料理など、それが自然に身に付き、引き継がれていくことが大事。博物館や図書館が、それを補助する役割を果たすと思うが、それが各地域にあって、自然とつながりを持つ環境にあることが望ましい。

○　公民館について、現状と課題をみると、運営論だけが強調されている。住民に対して多くの機会を提供し、意識改革を図りつつ、それが社会教育の「運動」につながるような取組みにすべき。

○　小学生の地域活動に対して、中学生の地域活動への機会が非常に少ない。もちろん、塾や部活動の影響など一定の制約はあるが、ある程度の強制力を持った機会の提供でないと地域活動の活性化は図れない。県内１７の青年会議所の「青少年育成事業」と連携し、人材育成の取組みとして、ぜひ活用してほしい。